

幾何学分科会における情報の共有化について

濱田 龍義 (福岡大学)

1 序

ここでは、幾何学分科会で取り組んでいる研究情報の共有化について紹介を行なう。

まずは、幾何学分科会の公式ホームページについて、作られた経緯や現在の保守状況について述べる。

現在、私は日本数学会の幾何学分科会に所属しているが、幾何学分科会の公式ホームページの内容には直接関与していない。私が行なったことは幾何学分科会のホームページを公開するにあたって Web サーバとするコンピュータの選定や構築のお手伝いを少しさせていただいた程度である。しかし、幾何学分科会において公式ホームページの取りまとめをされている大仁田義裕氏（当時、東京都立大学、現在は大阪市立大学に所属）、現場で直接的に貢献をされている酒井高司氏の許可を得て、ここに紹介させていただくことにする。

2 情報共有のあゆみ

幾何学分科会における情報共有のあゆみについて、ここでは紹介する。本稿では主に電子的な情報共有について述べるが、その歴史を考えると微分幾何学文献センターの存在を語らざるにはおけない。

2.1 微分幾何学文献センター

当時、東京都立大学には日本国内を問わず、各国から微分幾何学に関連するプレプリントが集まっていた。そこで、東京都立大学の荻上紘一氏が中心となって微分幾何学文献センターを設立し、日本中に散らばる幾何学研究者に対してプレプリント情報を印刷、郵送するサービスを行っていた。プレプリント情報にはプレプリントの著者名と題名が印刷されていた。これだけの情報ではあるが、最新の情報を入手するためには主要都市の大学等、研究機関に行くしかない時代に、重要な情報源となっていたと思われる。

当時、東京都立大学には幾何学専攻の大学院生が数名在籍していたが、土曜日のセミナーが終ると、ラベル印刷された宛先とプレプリント情報が印刷された A4 用紙をいただいて、全員で一枚一枚折り畳んで封筒に詰めて各地に発送していた。おそらく数十箇所を送っていただろうが、毎週と言うわけではないが、月に一、二度ほどのペースで送付していた。

「微分幾何学文献センター」という立派な名称から、専属の事務員がいる組織のように思われていた方もあったようだが、実際は幾何学を専攻する大学院生が補助していた細々とした活動であった。時たま、プレプリントの複製依頼が舞い込むことがあったが、無理のない範囲で対応していた。

2.2 微分幾何学情報センター

1994年ごろになるとメールや Web 等のインターネット上の通信手段が研究上必要な道具として十分に普及してきた。当時、東京都立大学中村憲研究室では、TNT(Tools on Number Theory)^{*1}とRSNT(Reports of Seminars on Number Theory)^{*2}というプロジェクトが進行中であった。TNTはWebページとメーリングリストを通して整数論のソフトとデータの共有を行なっており、またRSNTは整数論のセミナーの全国案内のメーリングリストとして情報公開を行なっており、現在にいたっている。この頃の経緯については「数学科・数学専攻における計算機関連分野の研究・教育」^{*3}に詳しく述べられている。

微分幾何学文献センターにおいても、これまで郵送で行なっていたサービスを電子化することが検討されていた。そこでTNTをモデルにして、PPDG(PrePrints in Differential Geometry)というサービスが開始された。PPDGという名称は荻上紘一氏の発案によるものである。

メーリングリストを立ち上げるにあたっては何種類か検討した結果、そのころ東京工業大学博士課程に在籍していた深町賢一氏が作成したfml^{*4}に行き着いた。1998年ごろに教室のワークステーションが侵入されるといふアクシデントに見舞われたことをきっかけに、東京都立大学情報処理システムに依頼し、Majordomo^{*5}に移行する。

2.3 幾何学分科会メーリングリスト

PPDGは、開設当初から海外との研究交流を目的としていたため、通常は英語でメッセージ交換を行っていた。しかし、国内においてシンポジウムや研究会の情報、そして公募情報など、日本語を使用した情報交換の必要性は明らかであった。2001年に名古屋大学の内藤久資氏によって幾何学分科会メーリングリスト^{*6}が開設される。同時に幾何学分科会の公式Webページが名古屋大学に開設される。現在、幾何学分科会メーリングリストはモデレータ制を採用している。不用意に送信された情報がメーリングリストを通じて広まらないように、審査を通過したメールだけが公に発送されるように設定されている。

メーリングリストサーバとしてはfml 4.0が使用されており、現在も名古屋大学の内藤久資氏によって管理されている。メーリングリストに流れたメッセージは全て保存され、キーワードを元に必要なメッセージを検索することが可能である。

2.4 幾何学分科会サーバ

2003年夏に幾何学分科会公式Webページが名古屋大学から東京都立大学のgeomサーバ^{*7}に移設される。開設当初から現在まで酒井高司氏が専任の管理者として従事しており、サーバのアップデートやWebページのコンテンツ管理を行なっている。酒井氏はMartin Guest氏が研究代表者を務める科学研究費補助金で雇用されており、研究支援者として欠かせない人材となっている。

*1 <http://tnt.math.metro-u.ac.jp/>

*2 <http://tnt.math.metro-u.ac.jp/~nakamura/man/rsnt-guide.html>

*3 <http://tnt.math.metro-u.ac.jp/labo/INTRO/comp-98.html>

*4 <http://www.fml.org/>

*5 <http://www.greatcircle.com/majordomo/>

*6 <http://www.math.nagoya-u.ac.jp/~naito/geometry/mailling-list.html>

*7 <http://geom.math.metro-u.ac.jp/>

2.4.1 分科会講演会などの情報

geom サーバでは、その年度に開催される各種研究集会の情報を iCalendar スケジュールデータとして公開している。過去の記録を参照すると、2002 年度は 19 回、2003 年度は 30 回、2004 年度は 37 回に渡って大小様々な研究集会が日本各地で行なわれている。この iCalendar スケジュールデータは、名古屋大学の内藤久資氏によって作成されたスクリプトを利用して生成されている。iCalendar のスケジュールデータは Microsoft Outlook2000 以降、MacOS X の iCal、Mozilla Calendar、KOrganizer など、様々な環境で利用が可能である。

2.4.2 幾何学分科会便り、資料等

この頁では分科会会則、議員選出方法、幹事会要項などについて公開をしている。日本数学会には全部で 10 分科会存在するが、2005 年現在、ほとんどの分科会の公式ページにおいて、同様の項目が記されているようである。また、幾何学賞についての情報も公開されている。中でも、小畠守生氏による申請書「幾何学賞の創設の趣旨について」と、長野正氏による数学セミナー掲載記事「幾何学賞が創設された」が転載されており、非常に興味深い。

2.4.3 「21 世紀の数学」幾何学の未踏峰

書籍「21 世紀の数学」宮岡礼子、小谷元子編（日本評論社刊）は第 50 回幾何学シンポジウム記念企画として出版された。出版の経緯については小谷元子氏による「幾何学分科会特別企画「21 世紀の数学」出版の経緯」^{*8} に詳しい。経緯でも紹介されているように問題の公募、原稿の校正を geom サーバ上で行なった。問題の公募にあたっては冊子を作る際の便宜のため、 $\text{\LaTeX} 2_{\epsilon}$ によるスタイルファイル^{*9} が geom サーバで公開された。スタイルファイルは名古屋大学の内藤久資氏の手によるもので、利用方法についても併せて公開された。応募者は $\text{\LaTeX} 2_{\epsilon}$ スタイルファイルを用いても良いし、テキスト形式で提出しても良い。また、手書きによる郵送での応募も受け付けた。集まった原稿の校正については Web サーバによる基本認証を用いた。これは、問題提出者だけが出版される原稿を閲覧できるようにする措置である。

現在、「21 世紀の数学」に関する誤植の訂正が公開されており、読者へのサポートも geom サーバ上で行なわれている。

3 実験的な取り組み

以下に取り上げる Web ページは幾何学分科会の公式なサービスではない。あくまで個人の活動であり、実験的な取り組みである。公式なサービスというものは情報の信頼性に重点が置かれるため、どうしても最新の情報に更新することが難しくなる。実験的な取り組みの長所は即時性に重点を置いていることである。公式な情報発信源としての信頼性には劣るが、自由に情報を共有できる仕組みを実験的に提供することで、公式サービスにはない情報を補完できるのではないかと考えている。

3.1 Wiki/PPDG

Wiki/PPDG^{*10} は geom サーバ上で動いている実験的なサービスである。Wiki とは、ハワイ語の “Wiki wiki” に語源を持つ言葉であり、“quick” の意を持つ。Web 上で共同オーサリングを素早く行なうサイトを構

^{*8} <http://wwwsoc.nii.ac.jp/msj6/sugakutu/904/kikagaku.pdf>

^{*9} http://geom.math.metro-u.ac.jp/Problem_Session/geomprob.sty

^{*10} <http://geom.math.metro-u.ac.jp/wiki/>

築するためのツールとして知られている。Wiki は誰でも自由に Web ページを構成、編集することができるシステムとして、研究室などの小規模なグループでの情報共有に威力を発揮している。

興味深い取り組みとしては、幾何学シンポジウムに関する講演者一覧を作成する際に、この Wiki が使用された。これは第 50 回幾何学シンポジウムにおける小林昭七氏の講演で明らかになったことだが、1956 年に第 1 回幾何学シンポジウムが開催されて以来の過去の記録が残念なことに一部散逸していることがわかった。Wiki 上に公開されている講演者一覧は、小林昭七氏によって調査された結果を元に、塩濱勝博氏を始め、様々な方の資料提供を受け、整備されたものである。実際の入力作業については九州大学の大学院生数名の協力によって行なわれた。共同作業による情報公開に Wiki が用いられた良い例である。

3.2 tmugs サーバ

tmugs^{*11}サーバは、首都大学東京、幾何学グループによって管理され、様々な研究関連情報を公開している。英語による情報公開も行っており、海外の方に向けて日本の数学に関する情報を提供している。

tmugs の取り組みの中でも特筆すべき項目は“ソフトウェア”と“*What is Geometry?*”であろう。“ソフトウェア”では幾何学に関連するソフトウェアとして Richard S. Palais による 3d-XploreMath や Nick Schmitt による CMCLab を紹介している。中でも 3d-XploreMath は数学的可視化プログラムとして完成度が高い。各オブジェクトには、利用の仕方と数学的な解説が書かれた文書が添付されており、読みながらグラフィックスを見ることによって百科辞典的な使い方もできる教育的なソフトウェアである。“*What is geometry?*”は大学 3,4 年次から大学院修士課程の学生向けに簡単に解説された文書である。

- 「Energy of knots and conformal geometry」今井 淳（都立大学）
- 「Conformally flat structure (共形平坦構造) とその仲間たち」神島 芳宣（都立大学）
- 「ラグランジュ交叉理論のフレアーホモロジー」赤穂 まなぶ（都立大学）
- 「Willmore 予想について」安藤 直也（熊本大学）

リストを見ていただいただけるとわかると思うが、それぞれ一線で活躍されている研究者による論説である。学生・大学院生たちの幾何学研究への関心を高め、優秀な大学院生を引き付け、研究を活性化するという意味でも、このような取り組みは今後増えていくべきものと思われる。

4 今後の課題

最後に情報の共有化に関連して、現在抱えている問題点について考えてみたい。特に身近な問題として研究集会に関する情報公開を中心に考える。

4.1 情報の保存

研究集会情報が Web ページなどに公開される理由としては参加者への便宜が考えられる。そのため、研究集会が終了すると Web ページ自体がなくなるケースが時たま見られる。しかし、研究集会においてどのような講演が行なわれたかなどの情報は研究集会終了後も検索できる方が望ましいのではないだろうか。これまでのところ、数学における情報共有の動きは、組織的なものでさえ、いや、むしろ組織的なものほど保守、運用の要員を確保することが難しく、個人の尽力に負うところが大きい。研究支援環境の充実には人的資源を要することが共通認識となれば良いのだが、残念ながら、もう少し時間がかかりそうな問題である。

^{*11} <http://tmugs.math.metro-u.ac.jp/>

4.2 情報の多言語化

研究集会の案内となる Web ページは明らかに年々増えているが、全ての研究集会において英語などの Web ページが公開されているわけではない。英語で書かれた Web ページは日本語を解さない研究者にも重要な情報源となっているはずなので、将来的に増やしていくべきであろう。これまでは、研究集会における講演題目の言語は講演者に任されてきたが、最近では徐々に両者を併記するケースが増えてきたように思える。あとから講演題目を講演者以外の人間が英訳することは不自然であるし、このようなことは準備段階から取り組むことが肝心と思われる。やはり、研究集会の代表者による呼びかけが重要と思われる。

4.3 情報の更新

研究集会の情報に限ったことではないが、情報公開をしたは良いものの、更新が滞る場合が多々ある。様々な理由が考えられるが、やはり人的な要因が一番の問題であろう。しかし、人的資源というのは、ある程度までは金銭的に解決できる問題であり、研究支援については、組織的に解決していくべき問題ではないだろうか。少なくとも幾何学分会においては、情報共有の必要性についての同意が得られているものと確信している。今後は、次の世代に引き継いでいけるような仕組み、すなわち、複数の管理者によるデータベースなどを用いた管理体制の構築も検討すべきであろう。

4.4 技術的な提案

最後に、情報公開に伴う保守、運用のコストを下げるための技術的な方向性について考える。

これまで、Web ページを作成するためには HTML(Hyper Text Markup Language) を習得する必要があった。しかし、手作業では大規模な情報を集めた Web ページの作成には不向きであり、データベースとの連携という意味でも不安が残る。

容易に想像されるように、このような問題は研究情報の発信に限ったものではない。そこで、最近注目されているのが CMS(Contents Management System) と呼ばれる環境である。有名なものでは、XOOPS^{*12}や Nucleus^{*13}、Plone^{*14}などが挙げられる。

CMS を用いることで、簡単に情報をデータベース化することができる。また、Wiki と同じように簡単に Web ブラウザから編集することができるという利点を持つ。ユーザ管理機能も備えているので、編集メンバーや公開ページを限定することができ、この点は Wiki と大きく異なる点である。例えば、研究集会の代表者各々が部分的な管理者となって、それぞれの研究集会情報だけを更新するという事も可能である。また、CMS によってはワークフロー機能を備え、公開の是非を代表者が管理できるものも存在する。さらに、多言語化についても、モジュールとして機能を追加できる CMS が存在する。このような観点から、今後、電子的な情報共有化を考える上で、CMS の活用は十分検討に値する。

5 終わりに

本稿は 2005 年 3 月 10 日に京都大学数理解析研究所において行なわれた研究集会「電子情報交換に関する最近の話題」に由来する。講究録が出版予定なので、詳細に関しては是非そちらを参照していただきたい。

*12 <http://jp.xoops.org/>

*13 <http://japan.nucleuscms.org/>

*14 <http://www.plone.jp>